

研究論文

# カリキュラムのグランドデザインにみる教師の暗黙知(1)

## —— 研究開発学校の事例を中心に ——

緒方 真奈美<sup>\*\*</sup>

### Teacher's Tacit Knowledge of Curriculum Grand Design (1) Analysis of Research and Development schools

Manami OGATA

#### 1. 問題の設定

本研究は、教師の暗黙知の視点からカリキュラムづくりの諸過程を調べる研究の一環をなしている。本稿ではとくにグランドデザインというマクロな観点から、学校づくりを視野に入れた実態調査を行うための第一次報告として、文部科学省研究開発学校の事例を対象にカリキュラム構想図の特徴を明らかにする。

各学校が構想し編成するカリキュラムには多様なレベルのデザイン場面がある。例えば、マイクロレベルのカリキュラムデザインが各教科、領域、学年別の目標から構想される単元や日々の授業計画であるとするならば、校長や研究主任が先頭に立ち学校の教育目標から構想されるマクロレベルのものは「カリキュラムのグランドデザイン」(Curriculum grand design: 以下 CGD と略記)と捉えることができる。グランドデザインの意味は「国や組織の在り方などに関する、将来を見据えた長期的・総合的な構想」であるという<sup>1)</sup>。これを学校教育の場合で考えれば、それは教育活動全体にわたる長期的な方向性を示す計画であり、学校づくりと一体化されたカリキュラムづくりである。従来こうしたマクロな観点からの学校教育研究は主として学校経営学の分野で行われてきたが、カリキュラム研究においても取り組む必要性のある研究テーマである。

なぜなら、特色ある学校づくりが叫ばれる今日、学校のグランドデザインは教師集団の「知恵」を生かしたカリキュラムづくりに集約されるからである。この問題は学校経営学でもこれまで十分には解明されてこなかった。そこで本研究で

---

<sup>\*\*</sup>筑波大学大学院人間総合科学研究科学校教育学専攻(カリキュラム)

は、教師の「暗黙知」(Tacit knowledge)を手がかりに、CGDの実態を解明しようと試みる。ここで暗黙知を分析の鍵概念とする理由は、教師の暗黙知がカリキュラムづくりにおける彼らの創意工夫を生み出す知識概念だからである。緒方(2008)によると、ミクロなレベルの教室場面でみられる暗黙知は、教師と眼前の児童生徒との相互作用のなかで臨機応変に活用される知識であるという。では、マクロな学校づくりの場面において、教師の暗黙知が用いられるとすれば、それはどのような特徴を示すのか。そこで参照される熟練した知識は、学校経営に関する客観的な知識だけではないだろう。すなわち、学校づくりには、教師の「願い・思い」といわれる情熱をベースに、経験に裏付けられた「わざ・見通し」といった主観的な知識が必要である。

かつてマイケル・ポランニー (Michael Polanyi)<sup>9)</sup>は、科学者の発見や探究には普遍的な理論的知識とは別に個人的な知識、つまり暗黙知が存在することを唱えた。CGDでは教師個人というより集団としての創発性が発揮される。したがって、個人的知識が組織的知識へと拡大し、やがては教員チーム内で伝達され共有されるプロセスがみられる。本研究がCGDに注目する理由も「暗黙知は形式知と異なり、組織的に伝達・共有することが困難な知識である」という定説に疑問を感じるからである。教師の暗黙知はCGDというマクロで集団的な活動場面において顕在化するのではなかろうか。

この点で、文部科学省研究開発学校の場合、学習指導要領の枠を超えて実験的なカリキュラム開発に取り組んでおり、次期改訂に向けた実証的な資料の収集と共に、新しい学校づくりの構想までを含めたCGDを試みていることが注目される。そこで提案されるカリキュラムの全体構想図には、学校長を中心に指導主事を交えた教師の暗黙知が埋め込まれているのではないかと想定される。とくに三年という短期間に新教科や新領域を開発しその実践研究を進めるプロセスは、教師の暗黙知が「総動員」される過程である。

本稿ではCGDに関する研究の第一段階として、研究開発学校の事例に注目し、次の手順で予備的な考察を試みる。第一に、本研究が注目するCGDの概念を明確にするためにその意義について検討する。また、これと分析視点である暗黙知の関連について考察する。第二に、暗黙知の表出形態という分析視点から、研究開発学校の報告書にみられる構想図等に注目しその特徴を把握する。そして、最後に、実際の事例を取り上げ、CGDの働きと、どのような過程を経て形成される

のかを明らかにする。これらの作業によって、本稿ではCGDの概要を把握し、今後の研究ではそこに教師の暗黙知がどう関係しているかを明確にすることを目指す。

## 2. CGD における教師の暗黙知とその分析視点

そもそも、CGD とは何か<sup>9)</sup>、それは教師の暗黙知とどう関係していると想定できるのか、ここでは本研究の手始めとして、両者の関係を分析するための視点を暫定的に設定する。一般に各学校でのカリキュラムづくりでは、教育目標の実現を目指して指導内容を計画し、学習環境の整備が行われる。それは何を、いつ、どこで、どう教えるかをデザインする営みであるが、そこにはいくつか段階があると考えられる。本稿が目指す CGD は、学校教育全体の方向と枠組を構想する最初の段階であり、そこには二つの役割が考えられる。第一は、「グランド」という語が示すように、対象は学校の教育活動全体であるために、個々の学級活動と学校全体の方向性を「調整する」役割である。第二は、CGD の提示によって具体的な内容よりも向かうべき方向と目標を具体的に示す「下図」としての役割である。こうした「下図による調整」は、日々の教育活動を学校づくりのなかで位置づけ、それを意味づけるものである。したがって、CGD は途中で修正する余地を残したデザイン概念の本質的な特徴をもっており、それはマスタープランよりも柔軟で緩やかな特質を示すと考えられる。

この点で、CGD と教師の暗黙知との関連性をポランニーの暗黙知論に即して整理すれば、次の四つを分析視点として設定できるのではないかと考える。すなわち、①「個人に属する」知識であるので、CGD の原案として教員の中の誰が提案したものであるのかに注目する視点、②「身体化された」知識であるので、それを教員のセンス（身体感覚）として捉える視点、③「他者に伝達することが困難な」知識であるので、表現し伝達するための手段に注目する視点、そして、④「創造的活動に深く関わる」知識であることから、CGD の創出過程に注目する視点である。本研究では、これら四つの視点を重視しながら、以下の考察を進めることにする。ただし、この四つの分析視点は飽くまでも暫定的な仮説に属するので、今後、改良を図っていくべきものであることは予め断っておきたい。

上記の視点からみれば、学校教育や教育課程の「構想図」等は CGD そのものであり、それは教師の暗黙知が表出した資料として重要である。例えば、研究開発学校に準じた実践を行う文部科学省学力向上フロンティアスクールである東京

都足立区立弘道小学校の学校長によれば、「グランドデザインを描くことを通して、教員の組織力の向上が大切であることを教員自身が分かり、目標を共有・分担する意識が持てた」と振り返っている<sup>64</sup>(図1参照)。弘道小学校が描いた図は、必ずしも CGD として構想されたわけではないが、しかし、学校づくりにおいて各教育活動をどう位置づけるのかを具体的に一望できるように図示しており、本研究の関心からすればきわめて興味深い。

そこで本稿では、CGD における教師の暗黙知が表出した資料と考えられる構想図についてその特徴やカリキュラムづくりにおける働きについて考察し、今後、CGD の暗黙知についての継続的な研究の基礎部分の構築を図る。



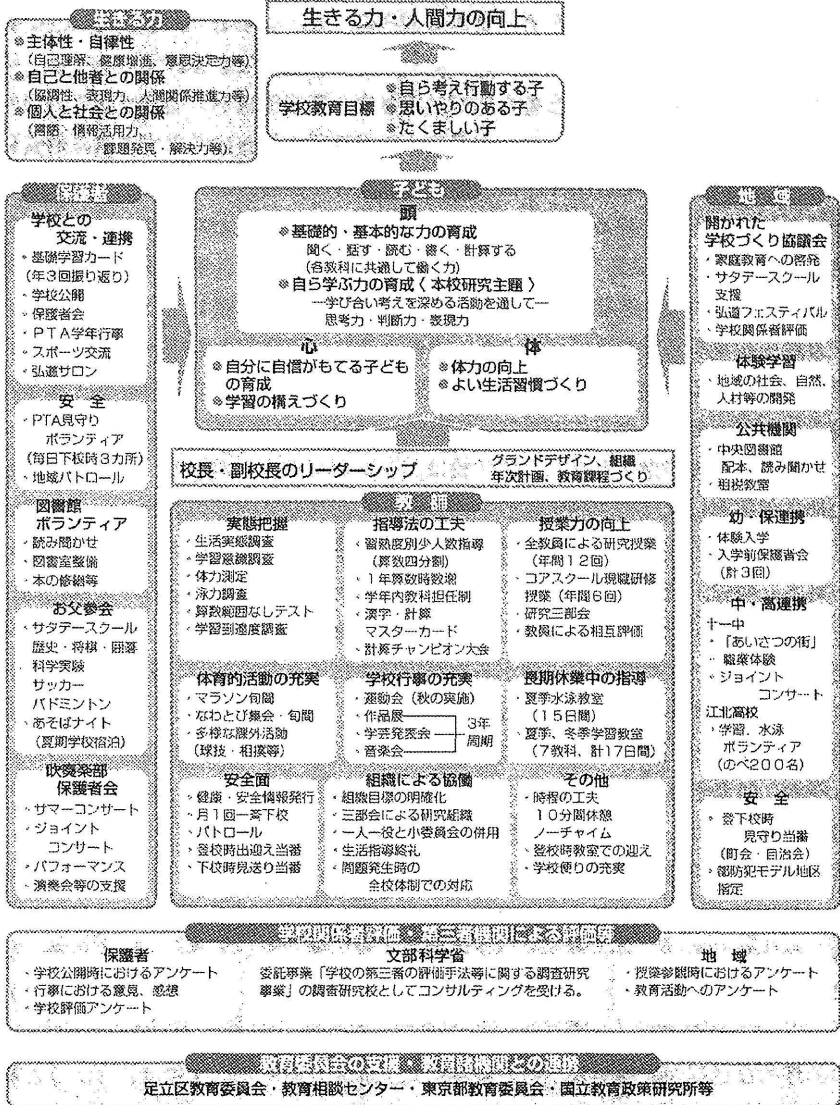


図1：弘道小学校のグランドデザイン

### 3. 研究開発学校報告書における構想図の分析

ここまでの考察によって CGD とそこに見出せる暗黙知の実態解明には、構想図等の図表を検討することが有効であると推測できる。そこで、本稿では、研究開発学校が提出する研究開発報告書に記載された構想図等を分析する。

本稿が研究開発学校の報告書を分析対象とする意義は以下の通りである。周知の通り、文部科学省研究開発学校制度は、教育課程の改善に活用する実証的資料を得るために昭和51(1976)年に設けられた。現行の学習指導要領によらない教育課程の編成と実施を認めているため、各学校の特色を反映したカリキュラムが開発されている。例えば、平成19年度は51の幼稚園や小学校、中学校が新規の指定を受けており、小中連携や外国語活動等の現代的課題を反映した13の研究テーマでカリキュラムが試行されている<sup>6)</sup>。このように、研究開発学校はカリキュラムづくりを学校の中心的な研究課題として捉えている点で、マクロなカリキュラムづくりと捉えることが可能であり、CGDの事例として適している。

研究開発学校の指定を受けた各学校は、シンポジウムの開催等による研究活動の他に年度末には「研究報告書」をはじめとして「研究内容の要約」や「事業完了報告書等(国立法人・学校法人のみ)」を主な成果物として提出することが求められる。特に、最終年度に提出される「研究報告書」は研究の経緯や実践記録とともに CGD に対する総括的な評価を記載する重要な資料といえる。これまで、研究開発学校の実施報告書に対する検討は、主に国立教育政策研究所によって教育課程とその実施内容に対する成果と課題を中心に論じられてきた<sup>6)</sup>。そして研究開発学校での実践を主題とした近年の研究論文には例えば、英語教育のカリキュラムに関する事例検討(會澤, 1999)(石井, 2000)(伊藤, 2000)(白畑, 2001)や、総合的学習のカリキュラム開発事例の検討(時得, 1997)(鈴木, 1998)などがある。また、他に研究開発学校制度の特質や課題を論じたもの(永山・古賀, 2002)があるが、総じて試行したカリキュラムの実施内容の成果と課題を各教科や領域別に論じた研究が多い。研究開発学校が提出する報告書が有する意義は、先駆的な教育課程の実施成果だけではなく各学校がカリキュラムをどのようにデザインしたのかという実際の例示にもある。すなわち、研究開発学校の実施報告書は CGD の具体的な過程が記録されている資料として検討に値する。本稿はこのような観点から研究開発学校を CGD の事例として注目し、その報告書を中心にグランドデザインの実際について検討する。

そこで、まずは CGD の概要をつかむために、過去 5 年間に焦点を当て、平成 14 年度から平成 20 年度までに指定を受けた研究開発学校を対象に構想図等を概観した<sup>9)</sup>。その結果、各学校の構想図は形状によって「スパイラル型」、「ステップ型」の 2 つに分類できた。そしてまた、構想図ではないが、理想とする子どものイメージ図として「円形重複型」があり、CGD に大きな影響を与えていることが分かった。特に構想図には、教育目標と同時に、研究仮説やキーワードが組み込まれており、研究開発の理論的背景を図によって端的に表すことが試みられていた。構想図は CGD の中核を担う図であるといえる。

(1) 「スパイラル型」研究構想図(事例校；静岡大学教育学部附属浜松小学校)

図 2 は、静岡大学教育学部附属浜松小学校の構想図である<sup>10)</sup>。スパイラル型では、発達や学習の理解が直線ではなくスパイラルとして展開し、徐々に一点に集約されていくことが表現されている。統合的に子どもの能力観を捉えている学校が多く、ステップ型に比べて、情緒的な子ども観を有している傾向がみられた。

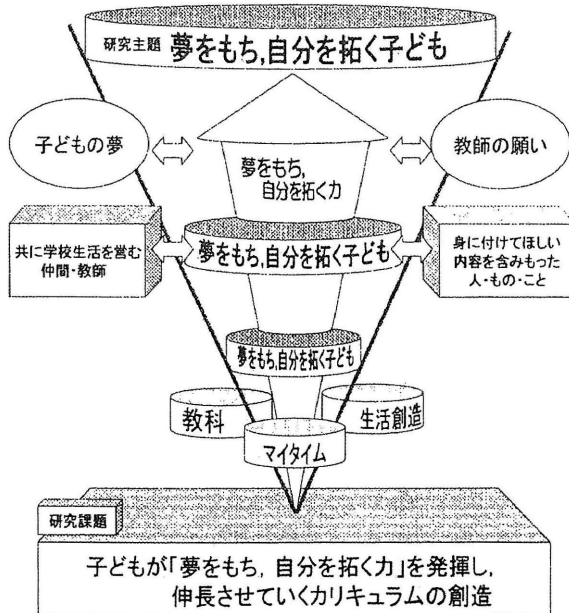


図 2：「スパイラル型」研究構想図

図2の静岡大学教育学部附属浜松小学校における研究開発課題は「子どもが『夢をもち、自分を拓く力』を発揮し、伸長させていくカリキュラムの創造」である。研究開発課題を受け、研究仮説次の3点が挙げられている。すなわち、「仮説1：教科課程において、各教科で子どもの夢と教師の願いの調和のとれた単元を構想し、実践を評価、蓄積することで、カリキュラムを創造する。(以下省略)」、 「仮説2：生活創造課程において、子どもが主体となって生活をつくりだしていくという理念をもとに、これまでの実践から教育内容を洗い出すことで、はぐくみたいもの、学習内容を押さえながら全体計画を作成する。(以下省略)」、および「仮説3：マイタイム課程において、子どもが、教科や生活創造などで、これまで はぐくんできた力を生かし、自分自身が設定したテーマに向かって追及しながら、一人一人の夢が深まり、広がるような実践を蓄積していくことでマイタイムのカリキュラムを創造する」、である。

構想図に注目すると、研究課題を土台にしたうえで、「マイタイム」「教科」「生活創造」の3つの領域が発展し、児童らの力の育成につながることが示されている。

## (2) 「ステップ型」研究構想図(事例校；大和郡山市立沿道幼稚園・沿道小学校)

図3は、「ステップ型」研究構想図の例である。

図3のような「ステップ型」の構想図では、幼稚園と小学校の重点が矢印で接続され、段階的に発展していく様子が表されている。この形状は、発達やカリキュラムの順次性を強調した研究開発学校に多くみられた。

ステップ型の事例である大和郡山市立沿道幼稚園・沿道小学校では、研究開発課題を「幼稚園・小学校接続期における系統性を重視した教育課程の編成と指導方法・指導体制の工夫・改善及び幼稚園からの楽しい英語学習についての研究開発」と定めている<sup>9)</sup>。また、研究仮説は「幼稚園と小学校の円滑な接続がおこなわれるなら、9年間を通して学びの力を育むことができるだろう」と、設定されている。研究開発課題や研究仮説をみてもわかるように、沿道幼稚園・沿道小学校では、各発達段階に応じた指導や支援が重視されており、CGDの要点が構想図に表現されている。特に、幼稚園と小学校低学年の接続部分に3つの重点を置き、両者の連携がとれた教育を強調することによって、教師個人が具体的な指導や支援を行う際の重点の置き方を明確にしている。

以上、二つの事例を概観すると、研究構想図には各学校の研究開発課題と研究

研究構想図

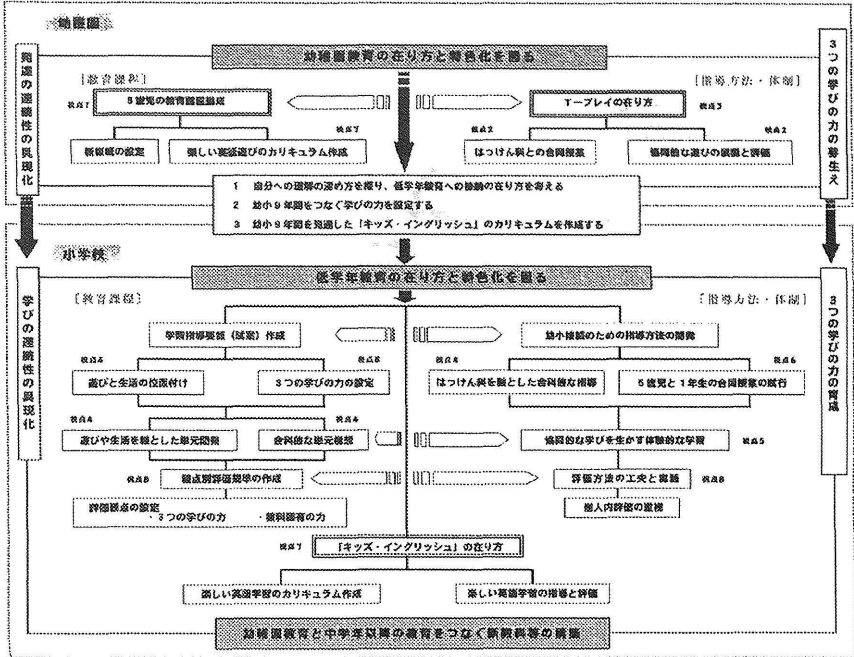


図3：「ステップ型」研究構想図

仮説が組み込まれ、教師らが理想とする子ども像や発達観、さらにそれを踏まえたカリキュラムのあり方が表現されていた。特に例に挙げたステップ型とスパイラル型は、どちらも、土台となる研究開発課題を基盤としながら、学校の掲げる最終的な全体目標に向けて矢印が描かれている。この二つのタイプは、多くの研究開発学校の構想図にみられる一定のパターンとして考えられる。

(3)「円形重複型」子どものイメージ図(事例校；お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校，東京学芸大学教育学部附属大泉小学校)

図4-1，4-2は、「円形重複型」のイメージ図の例である。「円形重複型」は、研究開発学校が理想とする子ども像についてのイメージ図によくみられる。子ども像のイメージは、先述した構想図の2つのタイプのように、直接カリキュラムに具体化されることは少ないが、CGDにとって重要である。

共同性：他者と協力して課題を見出し、解決していく資質能力を育てること  
 ↓子どもの姿  
 友だちと協力して課題を発見したり解決したりして、学びをつくりあげていく子ども

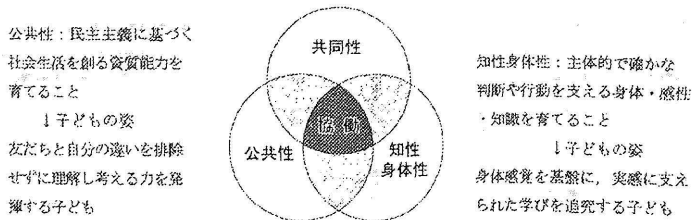


図4-1：「円形重複型」(事例校；お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校<sup>(10)</sup>)

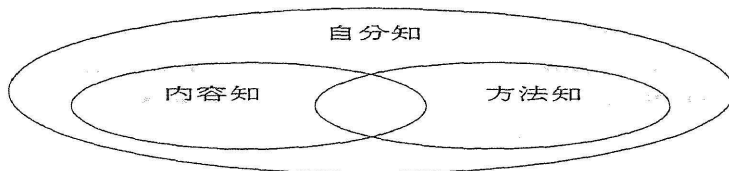


図4-2：「円形重複型」(事例校；東京学芸大学教育学部附属大泉小学校<sup>(11)</sup>)

図4-1のお茶の水女子大学附属幼稚園・小学校・中学校は、「幼・小・中連携一貫カリキュラム」をめざす研究開発学校である。理想とする子どものイメージは、各学年に関わらず「協働して学びを生み出す子ども」である。上図のイメージ図では、「協働」を中核にして「共同性」、「公共性」そして「知性・身体性」が児童生徒らに求められることを表している。また、同じく円形を用いて表現されている図4-2の東京学芸大学附属小学校の場合は、児童らに身につけさせたい学力を3つの知に分け、それらの重なりを重視して描いている。3つの知については、「学習の目標でもあり、子どもを見取る際の視点にもなる」と述べているように、カリキュラムの実践上、重要な視点となっている。

これらのイメージ図のように、円形の重なりによって子ども像を表現する図は他の学校でもみられた<sup>(12)</sup>。このことは、多くの学校が、子どもの能力を単一と捉えずに、多様な能力を関連づけながら育もうという考えの表れであるとも解釈できる。

このように、多くの学校では構想図等を描くことによって、これからはじめようとするカリキュラムづくりに対するイメージの可視化を図っている。これこそが学校づくりにおける「下図」としての CGD の役割である。次項では、実際のグランドデザインの過程を追いながら、構想図やイメージ図がいかなる働きを有するのかを検討したい。

#### 4. CGD の実際

ここでは、より詳細にカリキュラムのグランドデザインの実態を明らかにするために、事例として香川大学教育学部附属高松小学校(以下、高松小学校と略記する)の研究開発を取り上げた<sup>(43)</sup>。

##### (1) 事例校の概要

高松小学校は、昭和57年度からカリキュラムを3つの領域、すなわち、①総合的な学習として「しらうめ活動」、②道徳・特別活動を統合した「ふれあい学習」、および③「教科学習」で構成している。附属小学校としての性格上、様々な実験的試みを積み重ねてきており、カリキュラムづくりの経験が豊富な学校である。研究開発学校としては、研究テーマとして「その他新教科等」を選択し、平成14年度から3年間の指定を受けて研究を行った。

##### (2) CGD の創出過程の実際

研究開発学校では、学問的な研究活動と同じように、各校の問題意識を端緒に研究開発課題として設定し、研究仮説について理論的な考察を行なう。特に、研究課題の検討は、カリキュラムの研究キーワードを提案するための重要な作業として位置づけられる。

高松小学校の場合、昨今の教育環境に対する憂いを背景に、「21世紀をよりよく生きる人間とは」という問題意識を基盤にして研究開発が始められた。問題意識は図5のように表現されている。この図は、教師らが有している問題意識を図式化したものである。説明すると、「21世紀を生きる子どもの姿」とは高松小学校が目標とする理想的な子ども像である。そして「自らの才能を開花し、未来社会に夢や希望を持ち、人間としてよりよい生き方を求めて、たくましく創造的に自己実現に取り組む子ども」の育成を高松小学校は目指している。

高松小学校が理想とする子ども像を明確化するためには、児童らを取り巻く問題状況を考慮しなければならない。図5では「これからの社会の現実」と「青少年

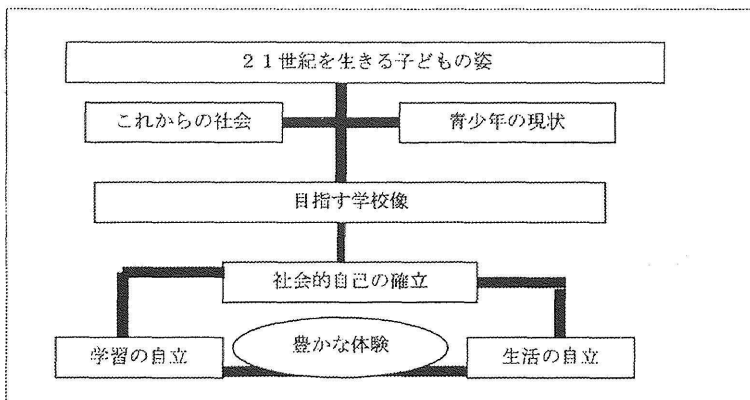


図5. 高松小学校の問題意識

年の現状」の2つの柱が示されており、より具体的には、高齢化やエネルギー問題、または子どもたちの社会性や倫理観の育成等が挙げられている。このような問題状況と理想とする子ども像を踏まえて、カリキュラムを具体化させるために、高松小学校は次の3つの視点を導き出している。すなわち、①「社会的な自己の確立」、②「生活の自立」、および③「学習の自立」である。つまり、高松小学校では理想とする子ども像と現実社会の問題状況との「ズレ」を克服するために、3つの視点からカリキュラムを具体化させることを示し、図5のように集約したのである。このような問題意識を受け、高松小学校は研究開発課題を「『つまずき』の分析に基づく基礎・基本の着実な習得と社会性の育成を踏まえた社会的自立を促すために積極的に一人一人の子どもの『才能の伸長』を図る教育課程の開発」と設定した。

文中にある「つまずき」と「才能の伸長」とは、研究キーワードであると同時に高松小学校のCGDのキーワードでもある。高松小学校ではこれらのキーワードが相反するのではなく目指す方向性は重複すると考え、特に「才能の伸長」を重視した視点から次のような学習者モデルを描いている(図6参照)。

図6は、「才能の伸長」というキーワードのもとに児童らが成長していく段階を示したものである。図中にあるように、「才能の芽生え」、「才能の発揮」そして「才能の伸長」という順に児童が生活や授業場面を通して成長していくことで自己実現を図ることが目指されている。また、「才能の芽生え」から「才能の伸長」へ





図6. 学習者モデル

の過程は一方的ではなく、各段階を往復しながら成長していく姿も表現されている。この図6によって、学習者としての児童の理想像を描き、具体的な授業計画の方向性を定めている。

例えば、学習者モデルの各段階に応じて次のような支援が例示されている。「才能の芽生え」の段階では「支援的風土、おちよっかい、経験を生かす」、 「才能の発揮」の段階では「自己開示・他者の受容、追及の多様性、可能性追求、ポートフォリオ」、そして最後に、「才能の伸長」の段階では、「学習体験からの価値観、自尊感情、自己有用感、社会的存在感、追求方向の判断、もう一人の自分、継続的な記録、学習過程の重視」などである<sup>(14)</sup>。このように、学習者モデルと、その段階に沿った支援を例示することで、個々の教師らの支援、指導に一定の方向性を保たせることができる。

以上のことを組み込んだカリキュラムの構想図が図7である<sup>(15)</sup>。図7のとおり、高松小学校の構想図は、先述した類型によるとスパイラル型である。つまり、様々な能力は理想とする子ども像を目指して集約され、「才能の伸長」が図られる。

図7では、先の問題意識で示されたカリキュラムを具体化するための3つの視点が中核となり、それに連なる形で研究仮説が立てられている。仮説には以下の

## 21世紀に生きる人間づくりの教育

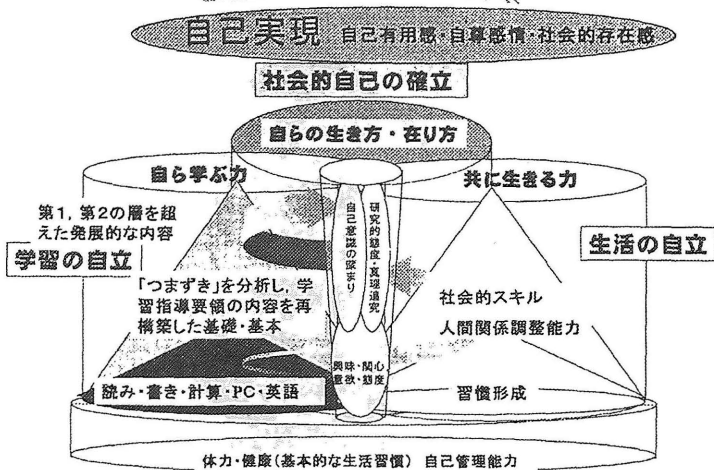


図7. 高松小学校の構想図

4つがあり、図中ではそれぞれを単語によって配置し、図式化している。

仮説1：午前のカリキュラムを教科教育で構成し、校種枠を超えて中学校教育も視野にいたれた「つまずき」の指導や発展的指導を行い、才能の伸長の基盤をつくる。

仮説2：午後のカリキュラムは才能の伸長の時間「楷の木活動」で構成し、子どもが自己の探究と創造の活動に取り組む中で、積極的に一人一人の能力・特性を伸ばす。

仮説3：「才能の開発」においては、体験活動や「本物(人・物)との出会い」の中で、学ぶことの意義や目的を見出し、自ら学び、進んで物事に挑戦しようとする意欲や態度を育てることが重要である。

仮説4：子どもの社会性を育成することは、才能の伸長において欠かせない要件である。

各仮説の説明と構想図との関わりを述べると以下ようになる。まず仮説1では、教科教育を中心に「才能の伸長の基盤」をつくることが目指し、構想図中は

「学習の自立」に関連づけられる。具体的には読み・書き・計算、PC、および英語が挙げられる。次いで、仮説2は、図7の中心的柱である「研究的態度」や「真理追求」に関連づけられた仮説といえる。そこでは仮説1における基礎・基本の充実を経て具体的な探究活動に移行することが目標となる。また、仮説3は、仮説1、2で目指した「才能の伸長」から「才能の開発」へと展開するための活動を指しており、構想図中ではスパイラルの帰結である「自ら学ぶ力」や「共に生きる力」の獲得に関連する。そして、仮説4では、社会性を身につけることにより、研究開発課題の「才能の伸長」を促す活動を指す。図中では、「生活の自立」と関連しており、人間関係調整能力や社会的スキルの獲得が最終的には社会的自己の確立基盤になるということがスパイラルの展開の仕方でも示されている。

以上の通り、高松小学校の研究仮説は、カリキュラムの全体構想(図7)の中で、単語や矢印などの表現方法によって描かれている。このように構想図はカリキュラムづくりの方向性や要点を盛り込んでおり、学校成員にとっては、やはり学校づくりの「下図」としてCGDの役割を果たしている。次の表1は、CGDを基盤として実際に編成された、各領域の概要である。

表1のように、高松小学校のカリキュラムは、「教科教育」「ふれあい学習の時間」「楷の木活動」という三つの領域によって編成され、それぞれの中心に研究キーワードである「才能の伸長」と「つまずき」の克服を位置づけている。各領域は次のようなカリキュラム実践上の特徴をもつ。

まず、教科学習であるが、才能の伸長を測る取り組みの特徴として少人数指導やT.T.(ティーム・ティーチング)を配置している。このことにより、「本質的なつまずき」を起こさせないカリキュラムをつくり、「基礎・基本を確実に習得させる目的のうえに、多様な個々の発想にできるだけ寄り添う学習形態を可能にする」ことを目指している。

表1. 香川大学教育学部附属高松小学校 各領域の概要(平成16年度)<sup>(46)</sup>

領域	各領域の目標及び内容の概要
教科	小学校学習指導要領の学年目標、内容の枠外を取り扱う場合もある。中学校学習指導要領に示された目標や内容を扱う場合もある。
ふれあい	価値形成と実践の統合を目指した取り扱いをする。
楷の木活動	才能の伸長を促し、自己探求を図る。

また、ふれあい学習では社会性の育成が中心的なテーマとなる。特に、「多様な子ども社会のなかで考える意味で、学級を単位とした同学年での学習とともに異学年集団の活動や学習も取り入れた」ことを特徴とする。例えば、「わんぱくグループ」という名の異学年集団をつくり、一年生を迎える会、運動会、または宿泊活動を通して、豊かな感情の交流を図っている。

最後に、総合的な学習の時間に相当する楷の木活動では、現行の総合的な学習の時間よりも70時間を加味し、編成している。この時間の特徴は、「子どもたちが個々で課題を設定し、解決すべき内容や方法において open に取り組めるように、6学年で段階を踏んで構成している」ことである。現行の総合的な学習の時間よりも授業時数を増やすことで、「自尊感情」、「自己有用感」および「社会的存在の意識」を育成することに重点を置いている。

以上のように、高松小学校では、「問題意識を表現した図」を端緒に「学習者モデル」、さらには「研究構想図」等といった様々な図表をもとにCGDが端的に構想されており、カリキュラムづくりの中核的機能を果たしていることが明らかとなった。つまり、CGDは、様々なタイプの図表によって構成され、段階を経るごとに明確になってくることが特徴として表れることがわかった。

## 5. 結論

本稿では研究開発学校の報告書をもとに、教師らによって描かれた構想図に注目し、CGDの実態について解明を試みた。検討の結果、構想図には「ステップ型」と「スパイラル型」の二つの形状が多くみられ、児童生徒に対する教師の学習観や理想とする学校像等が投影されていることが明らかとなった。また、理想の子ども像に関するイメージ図もCGDの一環として重要であることが明らかとなった。教師らのCGDに対する暗黙知が図表に表現されることで可視化され、他の教師との共通理解が促進されると考えられる。

特色ある学校づくりが求められている昨今において、CGDは学校づくりの基盤として重要な意味を有すると考えられる。例えば、高松小学校の研究開発に対する評価の項目では、同校の「学習者モデル」の図について、「才能の伸長については『学習者モデル』を作成したことにより教員意識の方向性がまとまってきた。」、あるいは「昨年まで抽象論で議論したことが多かったが、本年度は学習者モデルに照らして具体的な姿が議論の中心となった」等の肯定的な意見が述べられてい

る<sup>(17)</sup>。

このように実践家自身による図表は、カリキュラムづくりのイメージが描かれている重要な資料として価値があることが明らかとなった。それらに描かれた能力観や学習構造の学問的な裏づけは確かではないが、事例のように他の教師との共通理解を図り、実践の道標になっていることは事実である。

最後に、本稿の課題を述べる。本稿では、構想図を手がかりにグランドデザインの概要を明らかにすることができたが、先述した暗黙知の視点を用いて構想図を分析し、そこにみられる暗黙知の特性を詳細に把握することはできていない。今後は、CGDを構想した教員へのインタビュー調査を加えて、グランドデザインを様々な角度から検討し、グランドデザインとそこにみられる暗黙知の特性を明確にしていくことを課題とする。

## 参考文献

- 會澤まりえ 1999「児童英語教育をめぐる一 文部省指定研究開発学校の実践例を通して一」『尚綱女学院短期大学研究報告』No. 46, 83-93頁
- 石井勝典 2001「『総合的な学習の時間』を全生徒・全職員のものにするために一 文部科学省研究開発学校(平成11年度～13年度)としての取り組みから」『第19回教育研究公開シンポジウム あたらしい教育課程の創造—基礎基本の充実と総合的な学習の時間の展開』Vol. 19, 1-16頁 国立教育政策研究所(編)
- 石井靖業 2000「公立小学校における英語教育の効果と内在する諸問題—研究開発学校の実践事例を通して一」『異文化間教育』Vol. 14, 49-67頁
- 伊藤嘉一 2000「研究開発学校の英語教育の分析」『日本教材学会年報』Vol. 11, 143-145頁
- 緒方真奈美 2008「総合的学習のカリキュラムデザインにおける教師の『暗黙知』—A教師の単元開発を事例にして—」『関東教育学会紀要』第35号 77-87頁
- 金沢市立米泉小学校, 2005『平成16年度研究開発実施報告書』
- 白畑知彦 2001「研究開発学校で英語に接した児童の英語能力調査」『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』No. 33, 195-215頁
- 鈴木洋子 1998「小学校低学年からの食生活学習の構想—文部省研究開発学校新設教科および英国“Health Education”からの検討」『日本教科教育学会誌』Vol. 20, No. 4, 9-15頁
- 時得紀子 1997「総合的学習と表現教育：小学校における研究開発学校の実践を中心に」『上越教育大学研究紀要』Vol. 17, No. 1, 409-422頁
- 永山俊・古賀一博 2002「日本版チャータースクール『新研究開発学校』制度の特質と課題」『教育経営研究』上越教育経営研究会 No. 9, 18-28頁

野中郁次郎・竹内弘高 1996 梅本勝博（訳）『知識創造企業』東洋経済新報社  
（原著）Ikujiro Nonaka and Hirotaka Takeuchi, 1995, The Knowledge-Creating  
Company Oxford University Press.

## 註

- (1) 山田忠男（編集主幹）2005『新明解国語辞典』第6版（机上版）420頁
- (2) ポラニーは科学者としての経験をもとに暗黙知の着想を得た。  
Polanyi, M., (1966), The Tacit Dimension, Routledge & Kegan Paul.
- (3) CGD は、筆者の造語である。現在のところ、その学説上の意義は明確にはなっていない。
- (4) 片寄真理子2008「新たな構内体制を確立し、新教育課程を編成する学校運営」『教育展望』第54巻 第11号 6-7頁 教育調査研究所
- (5) 詳細は下記文部科学省ホームページの「研究開発学校制度」の「研究概要」欄を参照のこと。  
<http://www.mext.go.jp/a-menu/shotou/kenkyu/htm/02-resch/index.htm> (2008年11月10日現在)  
また、研究開発学校に関する次の資料を参考にした。
  - ・文部科学省初等中等教育局教育課程課2008年8月『研究開発学校関係資料』
- (6) 例えば、以下のような研究成果報告書が国立教育政策研究所によって発刊されている。
  - ・国立教育政策研究所2001『昭和62年～平成10年度 文部省研究開発学校における研究開発の内容に関する分析的検討』国立教育政策研究所
  - ・山根徹夫（研究代表者）2007『文部科学省研究開発学校における教育課程の研究開発の調査』国立教育政策研究所
- (7) 過去5年間に焦点を当てた理由には、研究開発学校制度が変更されたという経緯がある。すなわち、平成12年度から研究テーマは各学校の設置主体が選択することになり、これまで以上に各学校の希望が強く反映されたカリキュラムづくりが可能となった。そのため、平成12年度以降の事例が本稿の主旨により合致しており、制度変更後数年の定着期間を考慮に入れて過去5年間の報告書とした。
- (8) 構想図は以下の資料から抜粋し、掲載した。  
静岡大学教育学部附属浜松小学校『平成15年度研究開発実施報告書（第三年次）』
- (9) 構想図は以下の資料から抜粋し、掲載した。  
大和郡山市立沿道幼稚園・沿道小学校『平成19年度研究開発実施報告書（第三年次）』, 17頁
- (10) イメージ図は以下の資料から抜粋し、掲載した。  
お茶の水女子大学附属幼稚園・附属小学校・附属中学校『平成19年度研究開発実施報告書（第三年次）』30頁
- (11) 東京学芸大学教育学部附属大泉小学校『平成15年度研究開発実施報告書（第三年次）』

- (12) 例えば、金沢市立米泉小学校では、目指す子ども像が「道德教育」と「人件教育」の重なりを基盤として表現されている。(金沢市立米泉小学校、『平成16年度研究開発実施報告書』3頁参照)
- (13) 本項では事例として香川大学教育学部附属高松小学校を取り上げ、同校が発行した『平成16年度研究開発実施報告書(第三年次)』を分析資料として用いた。
- (14) 香川大学教育学部附属高松小学校『平成16年度研究開発実施報告書(第三年次)』11頁
- (15) 図2は、平成16年度研究開発報告書(第3年次)、21頁の「全体構想」の図を抜粋し掲載した。
- (16) 香川大学教育学部附属小学校 研究開発報告書、21頁より抜粋
- (17) 香川大学教育学部附属小学校 研究開発報告書、5頁より抜粋

# Teacher's Tacit Knowledge of Curriculum Grand Design (1) Analysis of Research and Development schools

Manami OGATA

The purpose of this study is to reveal Teacher's Tacit Knowledge of Curriculum grand design (CGD). For making curriculum flexibly and improbity according to child's reactions, it is necessary to recognize teacher's role as "designer". Teachers are expected to demonstrate creativity like a fashion designer. In this research, I paid attention to deep relations of "tacit knowledge" and creativity of teachers. In a process of designing curriculum, how "tacit knowledge" works is not clarified. Especially, the plan chart of Research and Development Schools (Kenkyu-Kaihatsu-Gakkou) for research purposes was analyzed, and the grasp of the outline of CGD was tried in this report. Research and Development schools for research purposes indicate the school specified to do pioneering practice to attempt the improvement of the curriculum. For example, the school of 51 has received specification in fiscal year 2007. The report of the schools are important as material that records the process of CGD.

In the case, the plan chart of the Takamatsu elementary school was analyzed, and the creation process of CGD was clarified. As a result, the Takamatsu elementary school draws the plan chart by the spiral type, and has understood the diagram of various types composes CGD.

As a result, the feature in the plan chart can be divided into the spiral type and the step type. Moreover, it has been understood that the child image chart of the ideal is also important as part of CGD. The image chart saw a lot of round repetition types.

The plan chart plays an important role to the formation of CGD. How want to plan the curriculum by the teacher is made visible, and sharing with other teachers can be attempted. Worthy for the curriculum design, as the teacher has understood important material in the plan chart.

Future tasks are to clarify the characteristic of CGD and teacher's tacit knowledge through the interview investigation to the teacher. Because The expert teacher is redesigning the curriculum flexibly and dynamically at any time.